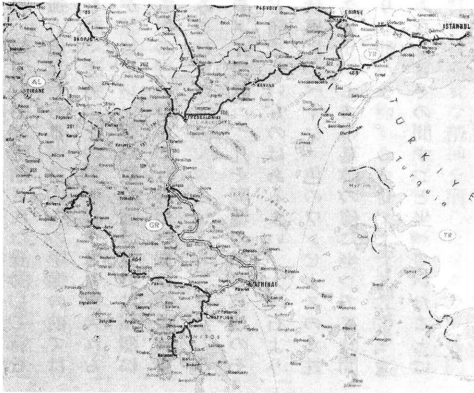


ギリシャ雑想

清水 澄



水蒸気というよりもスモッグを通してものの相をみることに慣れている目には、地中海の透明さの中に現前する鮮明で確実な事物の相はいささかの戸惑いを覚えさせる。「夜目遠目、傘の内」的美意識からすれば、そこにあるのは美しさというよりも荘厳さであり、ある種のやりきれなさである。若し人間の歴史がそこに深く染みついていないとすれば、この異様な自然の景観は実に索漠たるものに相違ない。痩せ細ったヘラスの地に、なお豊かな美しさと深い郷愁とを感じるのは白濁した近代日本人の血の故だろうか。

■アテネあちこち

アテネの街頭 ソクラテスが去って久しく、市民達は議事堂まで閉してのんびり暮しているようにみえる。しかし旅行者はソクラテスの墮落した子孫共に煩わされる。曰く、「僕は東京、横浜、神戸、福岡へ行ったことがある。日本人はなつかしい。一杯やりにいこう。」曰く、「俺の女房は日本人だ。家へ来てくれ。女房が喜ぶんだ」等々。それほど間拔けた面で歩いているつもりではないのだが、この虻共のうるさいこと。

■アクロポリス

かつてこの荘麗な神殿に鎮りいました神々は、今、一体、何処に座しますや。クロノス（時）とガイア（大地）に回帰し給うたのか。それにしても、その廢墟が美しくあるために何と巨大な労力と幾何学的嚴密さとを必要としたものか。

崩れ落ちたバルテノン石は白々しく乾いているが、北麓のアゴラの跡には人間の匂がなおたちこめている。瓦礫の間にタンポポに似てより可憐な花の咲いているのをみて、年甲斐もなく「滅びしものはなつかしきかな」の感慨に耽つたが、日の傾いたアクロポリスを仰いでふと思った。「しかし、あそこで結婚式を挙げようという発想は満更でもない」。国立考古博物館 大英博物館始め外国に散在する逸品を想い出すところ。

■ビザンツ博物館・ペナキ博物館

人間が神によって無より創造され、神の前で塵芥のごときであること知ることによって、かくまでもその創作が変容するものだろうか。神像を彫ることを禁ぜられた創造力が、絵具や綾糸を用いる時、かくも屈折した形象を画くことになるのだろうか。そこには最早や、おおかき、爽快さ、澄明さはなく、苦悩に滲んだ

強い線、類型の中に圧縮された混濁しているが力強い色彩がある。古代人の彫像の前では見者も亦、透明になってそこへと引き入れられるが、ビザンツの宗教絵画は見者に強烈に迫ってきて、その心にも苦しいまでの隈取りを刻みこむ。

ケラメイコス 凡そ廢墟の中で墓地のそれほど痛ましいものはあるまい。大理石より白い秋風に、ペーシユ色のワンピースの女性がデクシリレオスの墓碑の傍に坐つて二時間あまりも動かない。つまり、小生も彼女を「遠く」みながらその間ずっと坐っていたことになる。

アテネ大学神学部研究室 御多分に洩れず、こども手狭になつてゐるらしく、研究室の一部は繁華街の真中へ進出して、ビルの上階の一角を占めている。畏友スタトブロス博士は法然上人の研究書も出版している宗教学者である。詩人でもある彼は、御和歌のギリシャ語訳も出しているが、これはかなり売れたらしい。光明遍照十方世界ではある。「阿弥陀仏と心は西にうつせみの もぬけはてたる声ぞすずしき」の翻譯に苦心したという。夏の朝夕、蜩の声を聞きに、一度、京都へお

いでなさいと云つておいた。

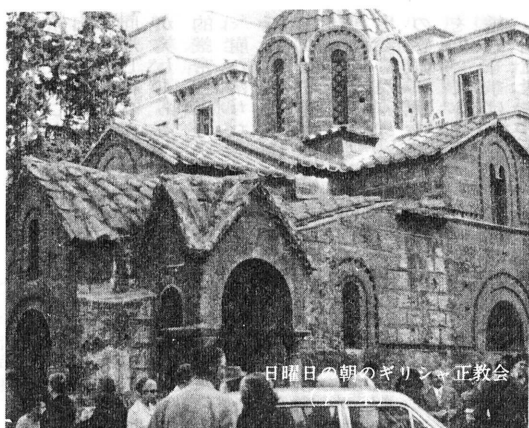
ギリシヤ正教々会 町並みの藁を抜き出して聳え立ち、天を突き刺す尖塔があるのではない。うす汚れたレンガ色の、柔らかな曲線の、低い円屋根がビルの谷間に沈んでいる。他の教派の教会建築とのこの相違は資力や技術によるよりは、「信仰体制」に由来するものであろうか。

一步、教会の中に入れば、イコンに蠟燭がゆらめき、イエス、マリヤ、使徒・聖者達、果てはプラトン等の哲学者の像が壁一杯に画かれてゐる。ここでは、神と聖者と人間との不思議な一体感が醸し出されてゐるとみるのは仏教徒の偏見ではなからう。異教の聖域に入り、それに馴染むのは難しいことである。ともあれ、この地上の神の国に入れば、あのギリシヤ風の十字をきつて心を静めねばならない。

ギリシヤ正教を国教としてゐるこの国では、聖職者はいわば国家公務員である。彼等のもつてゐるあたりを払う威厳は、歩く毎に翻る黒づくめの法衣によるだけではあるまい。トルコからの独立戦争で彼等の果した役割の大きかったことは歴史博物館へゆけば如実に知

れる。カテドラーラの隣の小さな教会の日曜学校で女性講師が熱っぽく語つてゐたのは独立戦争についてである。聖職者達の顔を厳めしくさせてゐるのは、宗教と国家権力との結びつきという歴史的な重荷を背負う苦しさだろうか。

食べ物 ピカソがラム・ステーキを好んで食つた話を聞き嚙つて、少しは彼にあやかるつもりでこのラム肉の国に来たのだが。宿



をとったオンモニア広場の一隅で羊頭を四つ五つ鉄串に刺して火に炙るのをみて、鯉や蝦の踊り食いの国から来たこの遊子、たちまち食欲をなくした。街を行く美女共も食羊鬼かと思うとおどましく、お陰で心清浄の境に住しえた。

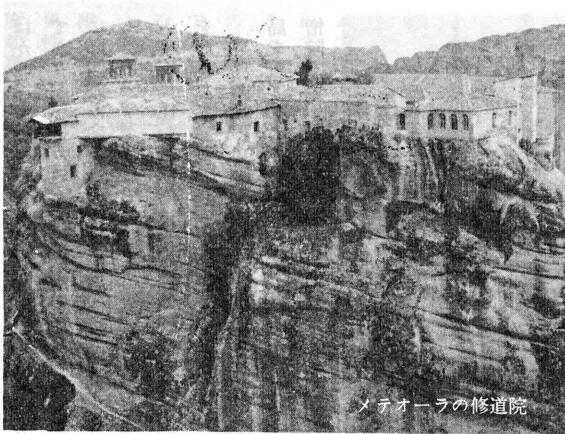
それにしても、この水の美味さはどうだろう。山紫水明の地に佳人生ると云われるが、古典ギリシャの文明の源泉はこの水であつたに相違ない。痩せさらばえ焼けただれたようなヘラスの地が良水に恵まれているのは、醜惡な容貌に高貴な精神を宿したソクラテスのイロニーであらう。ただし、軽レストランを「タベルナ」と称するのもソクラテスのイロニーであることを知っているのは、日本人だけである。

■デルファイ

アポロとディオニソスとが共に座す所、そこが大地の臍とすれば、大地の腹は何とも骨ばって荒々しい。髪ふり乱した女共が駆けたというパルナッソスの峰は昼の月を吐き、ソクラテスを誑かした神殿は崩柱を残すのみ。廃墟の一隅を細々と発掘している女性作業者

達は、よもやリュディアのクロイソス大王を欺いた巫女共の末裔ではあるまい。

かつてオリエントの選手まで集めたピティアの祭典競技が行なわれたのはこの地である。民族的祭典であつたオリンピックの競技が、国際競技として復活しているのを恨む松頼もなく、遺石累々としてあまりにも明るく澄んだ寂寥だけがある。



■聖なる山 または アトス山

アトス入山手続

東京のギリシャ政府観光局では手続が厄介だと脅す。アテネの国立旅行案内所では、日本大使館へ行つてギリシヤ外務省に手続をとってもらえと云う。日本大使館では、アテネで手続きをとるよりも、テッサロニキの地方行政局へ行けば簡単に許可してくれるという話だと云う。それが單に話にすぎぬとしても、母国の大使館の言葉に忠実なのが国民としての義務である。とにかくテッサロニキへ発つことにした。

テッサロニキの行政局で、少しは厳めしい女性係官が直ぐ許可書を出して呉れたのは、テッサロニキ大学神学部のジアカス博士の紹介の賜物であらうか。しかし更に同市内の旅行警察へ出頭して簡単ではあるが手続きを済ませねばならない。案ずるより生むが易しではあつたが、これは序の口で、アトス山から無事に帰れたのは、アテネ大、テッサロニキ大で美術研究に励んでおられる高橋栄一早大教授の御忠告によるものである。

アトスへの道すがら

アテネからテッサロニキへの途中、メテオーラの僧院を訪ねる。湖水の干上つた広漠たるテッサリ平原の北西

の一隅に巨岩群が聳え、その上に修道院が建っている。登れば建物の内部は意外に広く、小さなモニ・ロッサニスでも二、三人、大きなメタモルフオシス・ソテイロスでは三十人は住めそうである。もつとも今日では、修道僧の数も減つて前者では一人、後者でも五、六人しかない。巨岩の上で朽ち崩れた僧院もある。

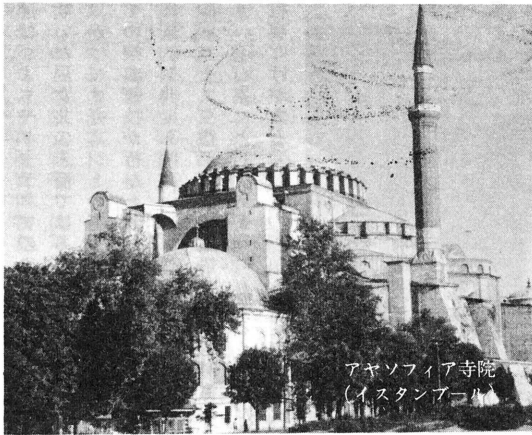
修行の場の設営は様々である。かつてロープを使って人や物資の上げ降ろしをしたメテオーラの場合は、世間から垂直面で隔絶されている。人里まで一日、二日という深山幽谷よりも、このいわば鳥籠的な修行の場はより強い意志力を必要としたのではなからうか。スパルタ郊外のミストラの廃墟にある尼僧院と同様、こゝも無住化・観光化しつつ、あつて何とも痛ましい。岩上の修道院の屋根に国旗がはためいていた。

アトス山 僧院巡礼

かつては牝の家畜の入山すら禁じたこの厳格な聖地を、高野山に譬えて日本に紹介した最初の人は南方熊楠ではなからうか。ギリシャ遠征のペルシャ軍をその沖合に沈め、クセルクセス大王をしてその付け根に運河を堀らせたこの長さ十二里

ばかりの半島は、ギリシャ正教の宗教的中心であり、ヘシカスムの根拠地である。最盛期には四万人余の修道僧達がこの狭い土地に住んだと云う。今日でも二十の僧院と多数の隠士小屋に住む修道僧達が女性禁制の宗教王国を形成している。

半島南端のアトスの岩山を別にすれば、半島を覆う緑の樹々に久しぶりに心も落ちつく。僧院を結ぶ道は、かつての石畳は破れて谷川



を行くごとく歩き難い。地道は或は落葉を重ね、或は岩を露して細々と続く。分れ道をどちらに進むか尋ねる人影もない。饑饉に備えたものか栗の樹の多いところは、折柄こぼれ落ちた夥しい実を踏んで歩く。林間、妙に静まりかえっているのは鳥声を聞かぬ故か。

アトスのいわば首都カリエからヴァトペディの僧院まで四時間余、そこからイヴイロンの僧院まで六時間余、そこからアトス山南東麓の最古の僧院ラウラまで八時間余、半島南端の岩場を廻つてアトス山西麓のハギ・アナの僧院まで八時間余。もう歩けない。山羊に頼りされている夢を見そうなゴワ／＼した異臭の毛布。狙いを定めねばならぬトルコ便所。シャワーも風呂もなく、ロシア語とギリシャ語としか通じない。正しくこの場所を訪れるべくはるばる来たものの、一刻も早くここから逃れ出たい。

しかし、又、こゝは何と魅惑的な土地だろうか。人なつっこい笑顔をみせる修道僧達は、図書館や、聖堂をみせるにしても、「アウリオ、アウリオ（明日だ、明日だ）」と云つて、天国の午睡を楽しむ。漸やくの思いで着いた僧院で先づ出してくれるコーヒーやウーゾー

の旨さ。バター飯を夕食に出してくれたラウラの誇高い食堂の僧は、来年も亦やって来いと云う。日本製のテープ・レコーダーを買いきたいというのだ。この天国と地獄の図を藤堂恭俊先生や成田俊治先生が御覧になれば何と云われるだろうか、僧院を彩どる壁画の素晴しさ。古書うず高い図書館。予備知識の乏しさを今更悔いても始まらぬ。ビザンツ時間で何時になるのか、更夜、祈りの時を告げるドラの音。何をどのようにしているのか、電燈もない僧院は静寂の闇。夕焼に染まるヴァトペイの僧院で、入山志望だというアテネ大哲学部の学生が、動く影一つない境内に暮れ切るまで立ちつくしている。時は止まり、音は死し、すでに荒廃の影が濃くたゞよっている。

■コンスタンチノール 又は イスタンブール

ボスポラス海峡 晩秋の明月をボスポラスでと、旅の終りの数日間をコンスタンチノールで過した。

アジア人だからアジアからヨーロッパへ歩いて渡ってやろうという料見が禍いした。い

や、昔の流行歌に浮かれて先ずウシユクダラへと思ったのがいけなかった。海峡をまたぐ大橋は、ヨーロッパ側約二杆は歩けるが、アジア側約一杆は歩行禁止で、自動小銃をもつたトルコ兵がどうしても通してくれない。自動車という機械に乗れば往来自由だが、人間生来の足では駄目だとは、何とも象徴的である。

トルコ博物館

このサルタンの宮殿博物館に入れば、アヤ・ソフィアの荘大な空間の薄暗がりで見つめた歴史的懐古は全く払拭され、ここがトルコの都、イスタンブールであることが思い知らされる。中国渡来の見事な陶器類、宝石をちりばめた刀剣類、目もさめるコーランの写本等々もさることながら、ハーレムの室々に到るまで肖像画・人物画が避けられているのには感心した。成程、ここはシルク・ロードの御仏達を削り取ったイスラム教の世界である。それにしても、アヤ・ソフィアの壁画をどうして完全に消さなかったのだろうか。

ブルー・モスク

たつぷりと埃を吸って獣の匂をなお残している一面の絨緞の上で、男性的なイスラム教の礼拝が始まった。信者席の奥まで入って坐り込んでいたので、ま

よとばかり一緒に礼拝することにした。隣のオヤジがこの偽信者をジロリ／＼と睨みつけるのに辟易して、その度毎に「アッラー」と称えることにしたが、冷汗の中で覚った。「俺は、本当のところは、この上なくズウズウしい奴に相違ない」と。アッラーの啓示とでも云うべきか。

■ギリシャ最後の夜

七年間眠っていた議事堂が目醒して、選挙運動が始まった夜。諸事に疎い者にも感じられるアテネの街の異様な興奮の中を歩いた。日本料理店で白ワインをしたたか飲んだのは、スタトプロス博士にとっては新しい日常生活への希望のため、こちらにとっては非日常的な世界への惜別の情が絡みつく故である。

「明日、帰国するんだ」と給仕の日本女性に云ってから、しまったと思った。外地で働く人の前では、帰国の話をするにしても、悲しそうな顔をして云うべきである。

これは私学協会、佛敎大学、浄土宗事務所の援助で、ギリシャ正敎研究のため四十九年の秋ギリシャに滞在した時の感想雜片である。

(文学部助教役)